



川崎長太郎自選全集 III

忍 び 草



河出書房新社

川崎長太郎自選全集Ⅲ

©1980

一九八〇年五月二十日 初版印刷

一九八〇年五月二十八日 初版発行

著者 川崎長太郎

装幀者 司修

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三―二

電話 営業 〇三―四〇四―一二〇一

編集 〇三―四〇四―八六一

振替 東京〇―一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製本 岸田製本紙工業株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

忍び草

忍び草

川崎長太郎自選全集Ⅲ

目次

徳田秋声の周囲 5

夕雲 69

彼 95

結婚 121

ある女流作家の一生 155

ふつつ・とみうら 181

うろこの記録 207

忍び草 231

海のほとり 283

解説 上田三四二 303

徳田秋声の周囲

大正十五年正月、徳田夫人は急死されました。と、先生は、俄に、つツかい棒外はずされたみたい、はた目にも正視するに忍びないような参り方で、葬式の当日など、会葬者のくやみに、ハンカチ片時も手放さず応対し、文字通りの愁嘆振りでした。五十歳まで、質屋と縁が切れなかったような暮向きから、随分夫人に苦勞もかけてきた筈ですが、夫人在世中はろくすッぽ浮氣らしい浮氣沙汰ひとつ、やってのけたためしのないようなひと柄でもありました。

夫人没後の身辺を慰めるべく、秋声門に出入する人数で「二日会」という会合が計画され、その下相談が大体きまると、男四人女三人は、料理屋の二階を降り、その脚で上野広小路の方角へ、ぶらぶら歩き出しました。正月月末の寒さに、街路へ並ぶ夜店あかりもしぼみがちで、仁丹その他の広告塔が、赤・青・白と大仰おおぎやうに色を換えながら、賑う辻の雑沓を見下ろしていました。

聴て一同は大きな菓子屋へ這入りました。まん中にある、電気ストーヴを囲み、コーヒー・紅茶等ののみ物を口にしながら、雑談が始まりました。そこへ、エプロンかけた女給が、円い菓子鉢を捧げるようにしながら現われ、客の肩すれすれに立ち止っては、器を前の方へ差しのべます。

私は赤い花形の菓子を一つとりました。彼女、山田順子さんは、どんなのをつまむだろう、とその方をそれとなく注視していますと、器用な仕方で私と同じものをとり上げるのでした。

いつ時して、一同店を出て行きました。「夫が亡くなった時は、それ程末亡人らしい気持もしなかったが、今度一人きりの子供に死なれてみて、しみじみそういう……」などと料理屋の二階でも述懐していたM女流作家は、洋品店の飾窓の前へ立ち止り、三つ四つの子供がかぶるらしい帽子を、吸いつくような眼つきで眺めていました。順子さんは、彼女と上背のそう違わない、鼻眼鏡かけた四十男と、横顔と横顔がくつつく位寄せながら、ゆっくり歩いています。

秋声先生は、ややもすると、連^{つれ}から遅れがちとなり、外套の襟へ霜をつけた口髭ごと突っ込むようにうつむき、五尺少しよりない小柄な体を、とぼとぼ運んでいます。数え年二十六歳という若僧の私は、始末にいかないぐうたらみたい、口から出任せの鼻唄、つぶやいたりしていました。広小路に、一番近い停留所で、M女流作家とO女史が、電車に乗り、残りの男四人、女一人は、いくらか向い風の出た、湯島天神のたらたら坂へかかりました。同性が一人になったところで、順子さんはひと際活気づくようです。坂を上るとすぐ、小さな古物商があり、飾窓にかかる、青竹に小芝をあしらった、淡彩の軸へ、先生は体を向けました。その左右へ、鼻眼鏡の四十男と、今一人狐色のチョッキを紺の背広の下へのぞかせる、作家志望で目下婦人雑誌の記者している青年が、近寄って行きました。

私は、一人ぼんやり、電車線路の曲り工合などへ、眼を落していました。と、そこへ、順子さんが、羽根を払げたみたいいな裾捌きでやってきました。私と彼女は、先達^{せんだつて}夫人の葬式の際、顔を

見知ったばかりの間柄です。近づく、彼女は、切長で特徴のある眼に、親しいような又全然他人のような、一寸判断に困るこみいった媚色つけ、下唇がいやに突き出た口もとをほころばせます。私は、反射的に、五体を棒みたいに硬直させました。東京の空気を吸って、既に二、三年たっていますが、まだひと見知り癖も抜けきらない、からきし内気な田舎者でしかありません。

「あのウ、皆さんお帰りの途中、私の所へ寄って下さるの。あなたも、いらしって下さるでしょう？」

「えッ」

「あなた、お友達になって下さいな。今、私一人で寂しいんです。一寸、世間から身を隠しているというふうなの。——お友達になって下さい。私、逆もフライよ」

と、下唇しゃくりながら、順子さんの思わせ振りの口上です。中学も満足に行っていない私は、第一「フライ」とは如何なることを意味する言葉か、さっぱりのみ込めかねますし、こんな女の言うことなど、ゆめ真にうけてはなるまいと警戒心怠りなく、が、その実、

「え、でも、あんたとうっかりお友達になり過ぎて困ることになるかも知れませんね。今、一人の女の話し相手さえいないざ、ますから」

と、正直なところを、筒抜けに言っただけなのです。

「いえ、そんなことないわ。わたし、もう男の方とは、お友達以上になりっこないから大丈夫よ」

と、彼女は、眼を細め、とってつけたように、首すじ動かしていました。

「ハ、ハハハ」

と、私は吐き出すような苦笑いです。

「ご覧なさい。気味の悪い月だわ」

下弦の、青ざめた大きな月が、天神の森の上に出ていました。

「あんたのような感じの月だな」

「気味が悪い。あの月、決して美しくないわ。——若い女の生首みたいッ」

と、口走り、ものを見る時の癖で、心持ち左の肩口落し、白狐のショールからスーツとのびている細頸も左にかしげ、舞台に立つ者のような仕方、彼女は遠い月を眺めていました。その裡、二人は並んで歩き出し、彼女はちびった私の駒下駄踏みそこねたりして話し込む裡、するりと傍から抜け出し、下等な比喩ですが、娼婦がマワシをとる如く、秋声先生の方に走って行き、自分より背の低い先生の耳許へ、上体を折り曲げるようにしながら口もとあてがい、何事か囁き出すのでした。

○

数日たって、亡夫人の五七日に当る晩、秋声邸で、第一回の「二日会」が催される運びです。

お百度の末、一、二の作品を先生の手から、雑誌社へ紹介される好運にありついた後も、時折私は秋声邸へお邪魔に上っており、当日朝湯であご髭など剃ったりして、午過ぎ下戸塚の下宿屋を出ました。

本郷三丁目の交叉点で、電車を降り、それから小売店、古本屋等並ぶ軒先をぼかぼか歩いて行き、順子さんの滞在している、瓦屋根で古風な構えの旅館の前まできますと、急に立ち止っていました。眉に八の字をよせ、暫く考えこみましたが、ままよといったふうに右向けをし、敷石づたい、一寸ひっこんだ玄関先へ、のこのこ這入って行きました。

順子さんは、当時既に一種の札つき女となっていました。東北のさる港町の、海産物問屋の長女に生れ、両親の膝下でわが儘一杯に育てられ、型通りはたち過ぎると間もなく、北海道の若いに似合わず名の売れた実業家の許へ嫁ぎ、当座これといったこともありませんでしたが、二番目の子供が生れたあとは、夫の事業に失敗が繰り返され、順子さんの実家始め、再三金銭上の迷惑を蒙る仕儀となった揚句、親許は見切りをつけ、彼女を手許へ呼び戻すべく、これを口説き込むといった工合でした。当人、満更夫を袖にする気もなかったものの、親共からやいやい言われてみれば、ついその口車にのせられた形で、二児を左前となった実業家の許へ遺し、海峡を渡り港町へ引揚げていました。で、二度目の縁組みを、心待ちして暮すかという、そうでもなく、かねて文学少女であり、北海道へ行ってからも、長篇小説など書いてみたりしている順子さんは、初婚につまずいてからは、より一層読み書きのことに熱中し出し、親共の思惑など尻目にかけて、顧みないような明け暮れでした。その裡、四、五百枚のものが出来上ると、それをかかえて単身上京し、先夫と同道、一度訪問した覚えのある森川町へ廻っていました。先生はこれに目を通して、出入りしているY出版社の社長へ紹介しますと、いっそ二つ返事で、相手方は出版の件、同意していました。社長といっても、社員が三、四人位の小さな本屋で、それは謂わば道楽みたい

な営みで、本業は別に持っている、鼻眼鏡の四十男でした。無論妻子のある人間ですが、出版と交換条件に作者の体を所望しますと、順子さんは大して臆するふうもなくこれを承知し、それから二人の仲に關係が出来、月々いくらという金も四十男の手許から、届けられる運びとなりました。彼女念願の長篇は、一本となり、日の目をみました、これといった反響はありません。依然として、社長とのつながりは継続中でしたが、順子さんは牛込神楽坂へんのカフェヘキストラ然と出、夜な夜な客にサーヴィスするようになったりしました。そこは特殊な雰囲氣漂う店で、高名な文士や洋画家等集るのも評判でした。大柄な体に似ず、なよなよした身のこなし方みせる色白女の名は、忽ちにして広まるといった塩梅式ながら、まともに彼女を相手にする粋狂者はあまり現われません。そんなところへ、先夫の親友で、先夫と異り、事業に成功し、代議士にも当選している男が、北海道から上京のみぎり、彼女の止宿先を訪問したところで、その晩に順子さんはチョビ髭生やす大男に身を任せ、上京の都度立ち寄るという相手から、金銭上の庇護をうける話もきめていました。つまりは、鼻眼鏡の社長の分も含めて、二重どりです。原稿をかかえ、東京へ行って女文士になるのだ、云々と青臭くいきまき、引き止める親共の手を振りもぎり、勝手に飛び出してきた彼女には、以後殆ど鏝一文、港町からの仕送りもなく、自らのペンでは端金すら所詮思うに任せない状況でもありました。俗に言えば、良家の子女として生い立った彼女の、あられもない処世振りは、多かれ少なかれ秋声先生の耳にも這入っていない氣遣いありませんでした——。

二階の奥まった六畳では、既に順子さんが、さもしげな恰好した口もとの紅づけ済ませ、剃り

つけた眉毛も三日月なりに描き、緋縮緬の大きな座布団の上へ、猫みたいにでんと坐っていました。心持ちぬき襟気味に、柄の派手な大島の袷を着、薄緑の地へ白く松葉を散らした錦紗きんしゃの羽織を、ふわッとひっかけるいでたちは、誰がみても素人のこしらえではありません。

私は、手もなく庄倒された如く、六畳へ足を入れるなり、すぐ立ち去るような素振りでした。

「まだ、始まるまで、三時間もありますわ。ゆっくりしていらっしやいよ。——トンビ、おぬぎなさい」

と、いつそ鷹揚な、順子さんの口の利き方です。

「なんだか、気味が悪いなあ」

と、くぼんで、余計小さくみえる両眼、ばちばちさせながら、私は外套をぬぎ、彼女と一メートルばかり離れた、斜め向うになる位置に、ぎこちなく坐りました。よごれた、銘仙の羽織のたもとに出来ている、一銭銅貨大の焼けこがしのあと、頻りと気になるふうでした。

目の向けどころに窮すると、母親に買って貰った、ちゃちな羽織の紐を、玩具にしたりしています。

「僕の下宿へも、遊びにきませんか」

「え、ありがとう。私、新聞記者なんかに、嗅ぎつけられる心配さえないけりや、何処へでも行きますわ。——近いうち、芝居へでも一緒に行かない？」

「光栄の至りですよ。フ、フ」

「ね、私のこと、外へ行つて、喋っちゃいや。約束して。秘密にしていってくれたら、私本当にフ

ライになるわ。約束して頂戴、さァ！」

と、スネに傷もつ身を、緋縮緬の座布団からひと膝のり出すようにし、私の鼻の先へ生白い小指を、つんとおっ立てます。

これを、反対に節くれだった、寒竹みたい指でひっかけ、私は瘦せこけた顔中、皺苦茶にしてみせるのでした。

「あなたの『新声』へのった小説、昨日拝見したわ。私、すっかり感服してしまったの」

「僕の甘ちゃんなのに驚いたでしょう」

「いいえ、いいえ。——あなたは、世の中の裏表を、おとしの割りに、こんなこと言っては失礼ですけど、舐めていなさるのね。その上に、にじみ出る甘さなのよ。——おいくつ？」

「二十六です」

「じゃ、私と同じ丑年ね。丑年は芸術家に向いているんだって。——羽左衛門もそうですって。強情で忍耐強くて、いいそうよ」

と、彼女は面長の顔面緊張させ、いくらかつり上り気味の眼頭、ムキに光らせるふうです。が、私はいつそ臆病に眉へツバ塗る勝手でした。そして、ゆらゆらと上下左右に揺れ動いて、静脈のすけてみえる、彼女の細長い首すじへ、ふらふらッと視線が吸い寄せられ、内心妙にせき立てられるような落ちつかなさです。ひょっこり、鼻眼鏡かけた四十男の赫ッ面が、この場へ現われな
いことか、などとそんなに気を廻すふうでもありません。本屋の主人と、彼女の関係は、生得うと
い私の耳にも、ひとの噂で多少は這入っている模様でした。